湖の絵

あかつき

今週の授業が終わり、みな席に着き始めて先生と帰りのホームルームが始まるのを待っていた。時期は六月に差し掛かろうとしているころだ。僕の学校の美術部はそろそろコンクール用の作品に手を付け始める時期になってくる。

「もう何描くか決めた？」

僕の前に座っている彼女が突然振り返りながら言ってきた。彼女も僕と同様に美術部の部員だ。

「もちろん。今晩、そこに行って少し描いてくるよ。」

「へー、夜景にするんだ。」

少し驚いた様子で彼女が言った。

「後輩も入ってきたし、僕たちも頑張らないとな。」

「先輩の意地だねー。」

顔を少し傾けながらにこやかにそういった。確かに自分にも意地のようなものはあるかもしれない。

「そっちはどうなんだ？」

自分も彼女に言われた質問を投げかけると彼女は虚を突かれたような顔をした。

「あー…そのことなんだけどさ、私も行っていい？おんなじとこ。」

急にそのようなことを言われたので「へ？」と少し間の抜けた声が出てしまった。

「お願い！全然何描くか決まってなくてさ、ちゃんと構図かぶらないようにするから！」

軽く手を合わせながらお願いされ、それに対し僕は少し考えるようなそぶりをし、軽くうなった。彼女は僕がその場に連れて行こうか悩んでいるように見えているだろうが実際はそうではない。二人で出かけるということなのだ。だから僕には一瞬、心の準備というやつが必要だった。

「同じところで同じ時間帯に？」

「時間は…どうだろう…でも最初はおんなじ時間についていきたいかな。場所わかんないし。」

「…わかった。しっかりやれよ。」

「ほんと！ありがとー！」

彼女がそういうと扉の開く音がし、先生が教室に入ってきた。それに合わせて彼女も髪を軽くなびかせながら前を向き、姿勢を正した。

―――

太陽が今日の仕事を終えようとしているころ、僕は待ち合わせ場所である学校の前に着いた。予定時間よりも十分早い到着だったがそれよりも早く彼女はついていた。

「早いな。」

制服ではない彼女の姿はどこか新鮮で、すこしどぎまぎ

してしまいそうだった。
「まぁね。待たせちゃ悪いし。」
「じゃあ行こうか。」
そういって僕は進行方向をそのままに、太陽を背にして彼女と一緒に歩いて行った。
「そういえばなんで夜景なんて描こうとしたの？」
「なんでだろう…気分っていてしまえばそれまでかも。」
「適当ですな。」
「君には言われたくなかったな。」
「あらら、言われちゃいました。」
「まぁ、強いて言うなら綺麗だったからかな。夜景にあるものってなんだか全部綺麗に見えるからさ。」
そんな風に会話をしながらぽつぽつと街灯に照らされた道を歩いて行った。

―――

「ここだ。」
目的地の湖に着き、辺りを軽く眺めた。
「おぉ～、いいね。」
そういって彼女は湖の周りを歩き始めた。そうしてる間に僕は絵を描く準備を始めた。周りはすでに暗くなってきており、用意していたライトは月よりも明るい光を放っていた。
「やっぱりこっちのほうにしようかな。」
湖を回り終えた彼女は向こう側を指さしながらそういった。彼女の示している方向を見ると彼女は僕が見ていた湖のほうではなく歩いてきた道のほうを書くことに決めたそうだ。遠くを見るとちらほらと住宅街のきらきらとした光が目に入ってくる。
「よし、じゃあやりますか。」
そういって彼女も準備に取り掛かった。お互い背中を合わせるように座り絵を描くことになった。なんだか少しもったいない気もするが仕方ないだろう。絵を描くために来たんだ。そういう風に言い聞かせ僕は手のつけられていない真っ白なキャンバスと向かい合った。

集中が長い間続いていたその時、いつの間にか垂れていた汗が目に入り、目の前にある絵の世界から切り離された。目をこすりながら大きな息を吐き、今まで書いてきたものを俯瞰する。だいぶ進んだほうだろう。そういえば彼女の絵はどうなっているのか少し気になった。こっそり見てやろうと後ろを振り向いてみるとそちらも同じことを考えていた。振り返ってしまった以上顔を戻すわけにもいかず、お互い顔を見合わせるような形になった。こんな風にまじまじと顔を見ることはなかっただろう、鼓動が少し早くなっていくのを感じる。何か話そうとしていたわけでもなかったので、お互いの間に気まずい沈黙の空気が流れていった。彼女も唇をしまい、目を泳が

せて少し気恥ずかしそうにしている。このままではいけない、なんとなくそう思った僕は何とか最初の目的を伝えるために口を開いた。
「どうだ？結構描けてるか？」
「え？あぁ…うん、それなりに描けてきてると思うよ。」
彼女は僕にキャンバスが見えるように少しずれてくれた。
「いい感じだね。」
「でしょ～？やっぱり場所選びがよかったのかな～。」
そんな彼女の言葉に僕が笑うと彼女もつられて少し笑ってくれた
「そういえばさ、また明日も来るの？ここ。」
そういいながら彼女は顔だけでなく体もこちらに向けてきた。
「多分来ると思うよ。」
彼女に合わせて僕も体を向きなおしてそういった。
「じゃあ…私もまたついていこうかな～、いいでしょ？」
「いいけど、わざわざ僕に合わせなくてもいいんじゃないか。」
「それは…ほら、夜だし、危ないじゃん。みたいな。」
「まぁ…それもそうか…」
「やった。寝坊しちゃだめだよ？」
「そんな夜まで寝てないからしないって。」
そんな冗談に少し笑っていると彼女ははっとした様子でポケットから携帯を取り出した。
「じゃあ明日の予定もたったし今日は帰っちゃう？結構時間たっちゃってるよ？」
そういいながら彼女は携帯の画面を僕の前に突き出して時間を見せてきた。
「あぁ…そうだな。じゃあもう帰るか。」
「そうだね。」
そして再び背中を合わせて片付けをし始めた。そして絵をしまう前に僕は思い出したかのように目の前のキャンバスに追加で被写体を描いた。少し髪の長い少女を湖のほとりに座らせたのだ。